

---

# いつも隣に腐男子

仙人掌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつも隣に腐男子

### 【Nコード】

N2199G

### 【作者名】

仙人掌

### 【あらすじ】

とある2人の幼馴染の話。腐知識は攻めと受けがわかればOKです。というより腐要素そのものがほとんど皆無なので、誰でも読んで大丈夫だと思います、多分。

「なあなあ、今の二人見たか?!」

「・・・あー、はいはい」

私は今、幼馴染の男と喫茶カフェという名前のケーキ屋に来ている。  
変な名前だけどいつの間にか常連になってた。  
まあそこはどうでもいいのだけど。  
今、私には悩みがある。

「やっぱ左側の少し釣り目の男の方が攻めかなあ?」

「はあ・・・」

この男のせいです。

『いつも隣に腐男子』

この男、腐男子なんですよ。

別に同性愛者ではないけど、男×男のカップリングが好き。  
女×女とでもいけるとか。

自分がその立場になるのは嫌だけど、好きらしい。

わけがわからない。

たまに私を妄想に使っているらしい。

この馬鹿男をどこかの山に埋めてやりたい。

しかし何の因果かこの男に惚れてしまっている私はもっと馬鹿か。

「や、むしろ右側の気の弱そうな子が攻めもありだな・・・」

「はぁ・・・」

ほんと何でコイツのことが好きなんだろ、私。

この男の何処に惚れる要素があるんだ。

コイツはこの喫茶店に来ては通行人をウォッチングして、妄想の材料にして楽しんでいる。

私は何故かそれに付き合っている。

そっち系の趣味の腐女子とやってればいいのに。

・・・それはそれで嫌か。

「どかした？さっきから黙り込んでるけど」

「い、いや、ちょっと考え事してて・・・」

顔を近づけて覗き込むなこのアホおおお！

やばい、今顔赤い？赤い？！

「・・・おまえなんか変だぞ？」

「だからなんでもないって!!」

覚<sup>さと</sup>られるな、覚<sup>さと</sup>られるな。

ある意味覚<sup>さと</sup>ってもらいたいけど。  
ってそうじゃなくて!

「はーん、さてはあっちの兄弟を使<sup>つか</sup>ってなんやら妄想してたな?」

「死ね!」

「うわ!?!」

気づいたときには、私の拳には生々しい人を殴<sup>う</sup>った感触があつた。

「おまつ・・・顔面グーはないだろ!」

はあ・・・本当にこいつはもう・・・

あーイライラする。

甘いもの食べなきゃやってけない。

ということで手元のケーキに手をつける。

モグモグ

うん、美味しい。

「なあ」

「何?」

「おまえとB組の笹塚さんだっけ?中々いい組み合わせだと思っんだが・・・」

ゴキッ！バキィ！ズゴッ！！グシャア！！メメタア！！ガキィッ  
！ドゴオ！！！！！！

「ちょ・・・なん・・・か・・・悪いこと・・・言っただ？俺・・・

」

「もうあんたなんか知るか！！」

その場から逃げるように立ち去る。  
ほんととあの男・・・！！  
ひとの気持ちを知りもしないで。

「ちょっと待てよ！！」

「おい、ちゃんと金払え、食い逃げする気が貴様」

「いや、それどころじゃないんだって！」

「シュークリーム×3、ショートショートケーキ×2、チョコラン  
マ・モンブラン×2、柔らかすぎるクッキー×3、ダンドーナッ  
ツ×2、超高級ティラミス×2、聖マリア風チョコレートパフェ、  
ロールケーキ型キャノン、RIGURU蒸しパン×3、五月雨クレ  
ープケーキ、ケーキ・オブ・ザ・トワイライト、スイートポテト・  
ラグーン、カドケシ型ケーキ、コーヒーマスター×2+おかわり8、まだあ

るが以下省略、しめて8280円だ」

「あいつそんなに食ってたのか!!?」

「払え」

「え、まじ？俺そんな持ち合わせが無いんだけど・・・」

「昨日バイトの給料日だったろ」

「何で知ってんの?!手が俺そんな金ねえんだけど・・・だあからあ、待っててばああああ!!!--」

「まあそれはともかく、お前に話がある」

「・・・え?」

遙か後方でなんか聞こえた気がするけど気のせいかな。にしてもホントアイツむかつく。そもそもあいつに惚れたのっていつだったけ?

「はあ・・・」

ため息が自然と出るほど陰鬱な気分です町を歩く。世界から切り離されたかのように、私の周りだけが暗い。負のオーラを纏ったまま商店街をさらに歩く。

バレンタインデーも毎年アイツにだけに渡してる。下駄箱や机に入っていた、他の女子のチョコやラブレターは全て焼却炉に放り込んでいる。

以前に直接告白しようとした子は、あいつの悪いところを教えて幻滅させてやった。

さりげなくアピールとかしてる。

これでも見た目にはかなり気を使ってる。

アイツの腐トークにだってつきあってし、そっち方面の勉強も一応してる。

けど中々努力の成果が見えない。

いつの間にか商店街を抜け、住宅街に入っていた。

結構な時間歩いたのか、日が傾き始めている。

子供達に帰りを促す親達の声が聞こえたので、少し顔を上げると久しぶりに見る光景があった。

「あ・・・あの頃の公園だ」

そこは幼稚園児や小学生だった時に、あいつとよく遊んだ公園だった。

懐かしい気持ちにひたりながら、公園の中をゆっくりと歩くとブランコが目に残る。

ブランコなんて何年ぶりだろう、と思いながら腰を下ろす。

キィ・・・キィ・・・キィ・・・

互いに同性の友達がいても離れることはなかった。

一緒にゲーセン行ったり、買い物行ったり、映画見たり、勉強したり、メールしたり。

女の中では家族を抜かせば、あいつと一番一緒にいると思う。

ケドそれってどうなんだろ？

やっぱり友達としか思われてないだろうか・・・

そこにいるのが当たり前前の空気みたいな存在？

「はあ・・・」

本日何度目になるかわからないため息をつく。

もう駄目なのかもしれない。

私には自分のことを、あいつに女として見せるのは無理かもしれない。

あきらめてずっと「トモダチ」でいるしか・・・

「帰ろ・・・」

日はもう完全に落ちたようだ。

随分長いことここにいたみたいだ。

今何時だろうと思って時計を見ようとすると、視界に入ってきたのは時計でなく見慣れた人影だった。

「お嬢さん、夜にこんなトコにいるなんて危ないですぜ？なんてな」。  
ホント何処行ってたんだよ、探したぞ」

アイツだった。

「私なんか探さずにさっさと帰ればよかったじゃないの・・・」

「お前の家に電話かけたら、おばさんがまだ帰ってないって言うてたから心配になってさ」

近頃は物騒なヤツが多いんだ、とかブツクサ言っていたが急にスツと真顔になる。

「ごめん」

「何が」

「お前の気持ちにずっと気づけなくて」

「・・・・・・」

黙るしかなかった。

超絶鈍感なアイツが私の気持ちに気づくはずがない、そう考えながらも心の奥底は期待している自分がいた。

「ちょっと喫茶カフェのあの人と話してさ、はなしその後俺、考えたんだよ」

無い、無い、無い。  
期待するな。

期待した分だけ後で失望するだけだ。  
自分に何度も言い聞かせるが、期待感はさらに募っていた。

「今まで俺は迷ってるふりをして、結論から逃げてただけなんだと思う」

無い無い無い無い無い無い  
無い無い無い無い無い無い  
無い無い無い無い無い無い  
おまえ

私の期待する展開なんてあるわけが無い。

「俺はお前が」

アイツの真剣なまなざしを見たとき、頭の中がリセットされ、何も考えられなくなった。

否、逆だ。

走馬灯とでも言うのか。

死ぬわけじゃないのに。

今までの二人の思い出が頭の中を奔流する。

小さい頃からの10数年が頭の中を駆け巡る。

もしかしたらこの走馬灯は一瞬だったのかもしれない。

そしてそれらが収まりかけた頃、アイツが迷いを振り払うように、それでいてゆっくりと口を開く。

「笹塚さんじゃなくて、山川さんとのカップリングの方が合うと思うんだ!」

翌日、公園に近くの高校に通っている少年が倒れているのを近所の

子供が発見する。

## （後書き）

ども、仙人掌です。

予定より恋愛要素的なモノが多めになってしまいましたが、そのまま暴走したまま投稿してみました。

この話の主な登場人物の3人は（店の店員入れて）全員「宝蓮荘の高校生管理人」に出てきます。

番外編っぽいですが、あくまで登場人物をつかっただけの別のお話のようなものです。

腐要素を期待した方はスイマセン。

私自身よく知らないので・・・ごめんなさい。

そもそも腐男子っているのかなあと、そんなところから妄想をはじめて書きなぐったものなので。

読んでくださった方、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2199g/>

---

いつも隣に腐男子

2010年10月14日00時38分発行